# 草画帖

第八帖 春蘭号

春蘭といふ忘れつぽい天使たち

2017年2月20日。春蘭筆。
春蘭は竹、菊、梅と共に水墨の四君子。

**春蘭や三十余年わが庭に**　瀧井孝作

六角文庫の春蘭は25年目。2019年は四本咲いた。

2017年2月20日。
前年の枯れた苞衣で描く。花芽を着けなかった春。

2018年3月31日。
春蘭と空の三日月、そしてふうらの春心。

## 春蘭

二月
春蘭はまだ幼く
鱗片に包まれた様子は
ねずみ男か
白衣観音か
緑の葉陰で
つましく立っている

☆

産は雪国
古い館の黐(もち)の根元につき
一九九四年
初めて花芽をつけた

〈春蘭の綻ぶまでは童話家に〉

そうだ、その頃ぼくはおとなに幻滅し、サンテックスやステープルドンのように、たった一冊だけこどもに本を書きたかったのだ。おとなじゃないひとに、一度だけ語りかけたかったのだ。そうして、
ぷくぷく泡立ち
寝食忘れて
ワープロのキーを叩き
イマジレインにずぶ濡れになり

・・・・・・・・

やがて春蘭は開き
ぼくは書いた話を本にするために
今度は印刷工になり、製本工になった

☆

それから加賀で十年
その後の播磨で十年

〈春蘭を見つけて天狗綻びぬ〉

二〇一三年
ぼくの電子本が
世界の本屋に並んだ朝

☆

三月
春はまだ若く
春蘭は
痩せっぽち達磨か
白ずきんちゃんか

雪の舞う日に
突然の嵐と
遠来の珍しい客があって

迎える
二人の
じじばばである

2019年4月4日。
春蘭が友だちの星の王子さまもどこかの小惑星にいるだろう。

2018年3月31日。
こんな踊り好きの春蘭が咲いたこともある。

2019年5月5日。
蕾のまま開かない一本、では絵で開こう…

万芽万笑の季節。
それぞれの草で木で描く「春」という文字。

# 草話

蘭・竹・菊・梅は四君子と讃えられ、その四種を描くことで水墨の精神と筆法を学ぶことができる。もっともぼくは蘭でも竹でも菊でも梅でも（それを筆として）描いたことはあるが、それら四君子を骨法通り絵に描いたことはない。

＊

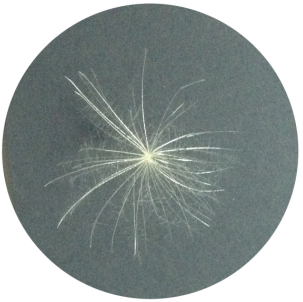
四君子というからには、蘭はもっと大きな花だと思い込んでいた。あの小さな春蘭を大陸の文人たちが愛でていたのだと知って、春蘭にも南画にも愛着が湧いた。

＊

こどもの頃はジジババと呼んでいた。土筆や蒲公英と違って、どこにでもある花ではなかったが、見つけた時の感覚はいまでも幽かに覚えている。幼少期の春で思い出すのは、蝶やオタマジャクシよりも、なぜかジジババなのだ。

＊

長じては、野生の春蘭を見たのは加賀の富士写ヶ岳で一度だけ。ブナ林の山径を下る眼に飛び込んできた。同伴のふうら陶像第一号との記念写真が残っている。



ケサランパサラン

俳句 白山鳥翁 ／ 絵 艸々子 ／ 詩 泉井小太郎

草画帖 第８号 2019年4月10日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039　Tel 0790-42-6008